

平成 28 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 高橋 秀栄

(1) 事業全体に対する評価

当該事業の適切性・妥当性について

昨年十一月二十一日に採択された国支援の本事業は、本校の七学部、一研究科が共同連携チームで取り組む画期的な一大事業である。複数の学部へ渡る実務担当者が目標の遂行に英知を出し合い取り組まれている。坐禅を淵源とする禅の教えは禅の指導者や研究者の活躍により国内外に広く知れわたっているが、さらに混迷に満ちた現代に適応した啓蒙活動も求められている。この事業は、数年後に開催されるオリンピック・パラリンピックを契機に我が国を訪れる人々にも禅の最先端の研究成果を情報発信するというきわめて有意義な事業である。この事業に携わる関係者の真摯な努力の姿勢と成果を見守りたい。

当該事業による目的の実現可能性について

本事業のスタートからまだ半年余りのため、取り組みに多少の遅滞があるかに推察されるが、事業計画案は期待度が高く、また注目される事業だけに、遅れが生じないように鋭意努力されたい。学際的チームの事業だけに、精度の高い調整も不可欠であるが、協調性を密にすることにより、大きな知的所産を蓄積することができよう。当面は駒澤大学の禅ブランドが世間に周知され、永続的な事業に繋がっていくことを視野に、実施体制の基盤を堅固にされることを期待したい。

(2) 源流および文化のチームの事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

初年度に提示された計画案の中に禅研究センターの開設、および花園大学国際禅研究所や公益財団法人禅文化研究所との連携が提示されている。本学の図書館が所蔵する禅研究の知的財産である『新纂禅籍目録』のデータベース化などは駒澤大学の禅ブランドを高める上でも有意義な事業である。他館や研究施設との相互連携を密にして目標の実現に努力を傾注してほしい。

当該事業による目的の実現可能性について

禅研究の最新情報を世界に発信すべく、本学所蔵の禅籍図書の情報網を網羅した『禅籍目録』の更新版の完成をめざし、寺院、図書館、研究所など関連機関と調整を計りながら、事業の促進に取り組まれている。禅の研究と情報の発信には正確な基礎データを集積することが最重要であり、その成果は国内の人々に提供されることは勿論、外国の禅研究者にも有益であり、着実に取り組まれるよう期待したい。

(3) 人の体と心チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	<p>情報化時代に生きる現代人の多くは、心に相当量の負担を抱えている。悩み苦しみをかかえた人は激増し、「心のやすらぎ」を求めて坐禅を組む人は少なくないという。禅の指導者、研究者は、坐禅にひとときの「安らぎ」や「落ち着き」を求める人々によりそって、魂の救済に援助する存在であってほしい。このチームは、禅の教えの中に現代人の心の問題に救済の道を模索し、新たな提言を試みるという目標を掲げ、その取り組みの一つを脳波測定としている。これは坐禅堂を備えている本学ならばこそ実施が可能な事業であろう。脳波測定を定期的実施し、その測定結果の公表を根拠に、禅のさらなる発展に寄与する糧としてほしい。</p>
当該事業による目的の実現可能性について	<p>はたして坐禅はストレスの解消や病んだ心の回復に有効なのであろうか。永年坐禅になれ親しんだ禅僧の協力を得て脳波測定が行われたことは過去にもあるが、坐禅は脳波のみならず、呼吸や血圧、さらには脈拍などどう関わるのか、明解な測定結果が知りたい。しかしながら、坐禅による脳波の測定とデータ分析の取り組みには専門スタッフの確保が不可欠である。その測定が定期的、支障なく、円滑に遂行できるよう配慮されたい。</p>

(4) 社会制度チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	<p>禅が現代人の身心、とくに心の問題にどう関わるのか、禅の研究者、指導者の発言や提言を享受する機会を多く持ち合い、禅に関する基礎知識を学ぶことが必要である。今年度においては、南カリフォルニア大学の先生を交えた勉強会やチームリーダーによる合同会議など数回実施しており、事業遂行の成果につなげる努力につとめているが、さらに意見交換を密にする体制の整備につとめていただきたい。</p>
当該事業による目的の実現可能性について	<p>禅研究の基礎的知識を全学的な実務担当者が共有するには定例的に研究会を開催することが望ましい。極力、回数を増やし、意見交換や質疑応答が活発にかわされることを期待したい。ことに禅研究センターの開設が急がれる事業の推進には多数の参加者の意見や要望が必要である。勉強会、会議、調査の実施回数を増やすにはきめこまかな日程調整や広報活動が不可欠である。そのような体制も整備しつつ、着実な成果を実現して頂きたい。</p>

(5) 社会貢献・世界発信チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	<p>禅の最新情報を世界に発信するための業務媒体となる専門業者の選定、ならびに業務提携の契約に向けた準備が進められ、一步前進となった。今後は各チームが業者と連携を密にしながら、とりわけ「禅による人の体と心の研究(心の問題)」に対する有益な成果を实らせてもらいたい。「禅」に関する情報探索は仏教、歴史、文学などの研究者とも連携し、探究を深めていくことが必要である。世界に発信する禅に関する最新情報を共有しあい、禅の一層の発展盛行をめざしてほしい。</p>

当該事業による目的の実現可能性について
<p>本事業の外部業者も選定され、事業の遂行にむけた本格的な取り組みが開始された。業者と四チーム合同の会議を通じて、世界に発信すべき情報システムについても共通理解が得られたという。これから数年間、智慧を出し合い、協力し合うことで、水準の高い、価値の優れた成果が期待できよう。ホームページやウェブコンテンツなどの作成を通じて、正確で有益な禅の最新情報が発信されることであろう。そうした有意義な事業の完遂を期待するものである。</p>

(6) 4チーム合同事業の評価
当該事業の適切性・妥当性について
<p>近年、禅センターと銘打った研究機関や禅僧の養成施設は少なからず存在するが、禅に関心を寄せる世界の国々の人々に禅のメッセージを発信するには、禅の教義、禅僧の生活、禅宗の歴史、禅宗の文化、禅宗の建築ほか多岐にわたる広範な知識も不可欠である。本学の計画案は禅の世界を深く広く視野に収めた新たな学際的研究領域を開拓するとの斬新な提案であり、画期的な事業となりそうである。4チームの担当者はその実施にむけ、歩調を合わせて不断の努力を傾注していただきたい。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>禅とは何か。古来、多くの禅僧や禅学者は各自の体験に基づく答えを提示しているが、それらを総合的に集め、合同チームや全学的な共通情報とすることが大切かと思う。古来の提示例を参考に、質疑応答を活発にかわし合い、禅の定義の理解を深めあい、オリンピックを機に来日する外国の人々にむけた情報発信の基礎的作業とすることもできよう。蓄積された情報のデータベース化により、適正かつ迅速な対応ができるが、それには人材養成も不可欠である。禅の最新情報を提供し続けていくことは喫緊の課題である。そのことを真摯に受けとめ、鋭意、努力されたい。</p>

(7) 事務部門の事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
<p>禅センターの設置と運営にあたっては、本学ならではの特色ある施設運営をめざすことが望ましい。そのためには業務遂行の一助として、他の大学の類似施設や禅センターなどをも視察し、運営の現状を長所、短所両面から総合的な理解把握につとめ、禅センターの有意義な開設にむけて努力されることを願ってやまない。あわせて「禅研究の世界発信に関する禅ブランディング・プランの募集」の掲載とその反応についても期待を寄せたい。</p>
当該事業による目的の実現可能性について
<p>禅センターの開設にむけた準備室の設置や実務分担の組織体制に遅れが出ているようなので、早急に体制を整えて着手されることを希望する。現在までのところ、各チームの分担業務は多岐にわたり、また予算の執行にも停滞が生じているようであるが、学長や各委員会の協力も求めて、適正な実務作業に取り組んでいただきたい。</p>

その他、要望や改善が望まれる事項について

本学所蔵の禅学図書を網羅した『禅籍目録』が国内外の教育施設や研究者にも活用されるよう、英文表記の項目増補を考慮されたい。また禅博所蔵の文化財資料名なども掲載されるならば、今後の禅宗をテーマにした展示の立案や禅の研究者との共同研究も一段と進展すると思われる。より充実した目録の完成を期待したい。

平成 28 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 高橋 光輝

(1) 事業全体に対する評価
当該事業の適切性・妥当性について
約 3 ヶ月の短期間の中で各事業部門は計画通りの業務が遂行されている。 これまでの禅に対するブランディングが大学としてどのように行われていたかという過去の振り返りも今後の計画に対して成功する要因になる。
当該事業による目的の実現可能性について
全学が一体となって本事業に協力し、実行していくかが本事業の要である。今後の年度ごとの実現に至っては、学長及び副学長を初めとしたリーダーシップが必要であり、取りまとめや業務分担など事務局の存在も非常に大きくなる。今後は成果を確認するフェーズに入る事もあり、大学全体での取り組みである事の学内認知を、教職員や学生を初めとして広げる必要がある。

(2) 源流および文化のチームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
『新纂禅籍目録』の更新に向けた作業が中心となっており、その準備に向けて研究班が立ち上がり準備も開始されたことは計画通りの成果があったと評価できる。その一方、本事業計画書の中で記載されたクール・ジャパンを代表とする海外における日本文化の再評価については、具体的な目標が明記されていると言いがたい。日本政府は、経済産業省にクール・ジャパン海外戦略室を設置し、日本の文化・伝統の強みを産業化し、それを国際展開するための官民連携による推進方策を行っている。つまり旧来からなる禅についての伝統的な研究が本事業の目的でも、我が国の政策でもないはずである。その点から考えれば禅は旧来の狭義における学術的な研究に縛らずに時代の潮流にあって大衆に理解される形としての方法やアウトプットが本事業において求められている。誰に向けての事業なのか、そのアプローチは適切か、今後見直しが必要になると考えられる。
当該事業による目的の実現可能性について
過去の禅に関わる資料や関係機関との取り組み、協力は進んでいることから計画は遂行できると思われる。しかしながら上記で掲げた単なるデータベースの構築や勉強会の実施では、世界的評価は困難であると思われる。

(3) 人の体と心チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	
マインドフルネスは、欧米ではすでにその効果について多くの実証的研究報告があり、ストレス対処法の1つとして現場で実践されている。その科学的な調査は極めて重要であり、より多くの人たちが禅を理解し広く周知させる方法としても適切であると言える。	
当該事業による目的の実現可能性について	
報告書では、広報手段が確立されていないとあったが、担当のスタッフを拡充させ取り組むべきである。また、今後の事業計画を実現させるためには全学が一体となって科学研究に取り組む体制が必須である。関係各位と密接なコミュニケーションを図り、学長のリーダーシップの元ブランド化事業の取り組みに対する重要性を学内で理解させることが実現に至る要素であると考えられる。	
(4) 社会制度チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	
現代の社会制度に求められるサステナビリティ等の思想的背景と禅とがどのように関係しているかは広く今日の社会にも発信されるべき内容であり、その意義は大きい。	
当該事業による目的の実現可能性について	
学部を越えて勉強会やセミナーなど学内教員に留まらず、海外大学の教員を招聘するなど短期間で、着実な成果が達成できている。今後も計画的な活動が期待できる。	
(5) 社会貢献・世界発信チームの事業評価	
当該事業の適切性・妥当性について	
コンテンツ制作や発信前の基盤作りとして、ブランディング戦略にあたっての専門業者を公募という公平な形で募集し、契約と次年度における活動計画が策定できたことは評価できる。また、とりわけ今日の情報過多社会ではソーシャルメディア戦略が重要であり、その為の基礎調査は今後の戦略作りにおいて極めて重要である。調査を行った専門業者との連携も取れており今後はその調査結果から発信方法の戦略が期待できる。	
当該事業による目的の実現可能性について	
今後は魅力的なコンテンツをどのような方法で広く認知していくかが重要である。今後作成されるホームページのUI（ユーザーインターフェース）やUX（ユーザーエクスペリエンス）はもちろんのこと、ホームページ閲覧に至るまでの戦略が発信力の根幹であり、多言語化はもちろんのこと、画像やイラスト、動画などコンテンツ自体にストーリーテリングがあっても良いだろう。また、コンテンツ制作に関しては学生らの意見やアイデアが有益なコンテンツになる可能性が高く、学部の教育と連動する形が好ましい。そのため他大学の講師を招いた特別講義などの実施も必要であると考えられ、今後の計画に追加する必要がある。	

(6) 4 チーム合同事業の評価

当該事業の適切性・妥当性について

学部や大学を越えて学術的交流と学際的議論を行う場を創設することで、新たな学際的研究領域を開拓する事は意義がある。

当該事業による目的の実現可能性について

貴学は総合大学であるため、学部においては本事業の計画と異なる意見もあるだろう。その意味においては本事業がいかに合同で新たな視座がもてるかが重要であり、今後も学長及び副学長を中心とした担当者同士のリーダーシップやコミュニケーションを期待する。

(7) 事務部門の事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

各部署が協力しながら適切に業務が遂行されている。また、各事業部の後方支援を事務局が担っている事がうかがえる。

当該事業による目的の実現可能性について

禅研究センター設置準備室の設置を見据え、事務局のスタッフ増員も検討すべきである。

その他、要望や改善が望まれる事項について

禅における研究は、宗派ごとの違いはあれど一定の基礎部分における共有はすでにできているのではないかと。その意味では本事業の目的は禅を大学及び社会に、国内から世界へ広く認知できるかである。それらを証明するためにも様々なエビデンスが必要である。

その意味からも既存の禅における学術研究とは明確に切り分けるべきである。また、クール・ジャパンの観点から広く世界に発信させるためには、動画など分かりやすい形で禅を理解させるコンテンツ制作が最も重要である。私自身の専門性から言えば、コンテンツ分野の教員として本事業において協力できる部分が多いので、今後はサポートできる部分があれば連動していくことも良いのではないかと考えられる。